金子翁を偲びて

高教一

私は、大正四年六月鈴木商店に入社し、鈴木化学試験所に就職した。其の翌日水素圧縮タンクが大爆発事件がありました。漸く同所でモナヂットサンドの分解試験等の研究を村橋様から種々指導を受けて、セリユウムとトリユウムの分離は一応出来たが、発火合金の試験にかかる中途で、日本金属大里精錬所に欠員が出来たので、至急其の方に行かねばならん事になったので、残念ながら発火合金の研究は中止の止むなきに至り、高尾君と共に大里工場に行き電気分銅を担当することになったが、原料一厘銭の、支那からの輸入が出来なくなった。従って工場閉鎖の止むなきに至り、沢山の従業員の整理をやった。而して日比製錬所からの粗銅も段々と減少した。其の当時、八幡製鉄のストライキ、熔鋼炉の火は消えており、（浅原健三氏）従業員と別れるのはつらい。何とか立直るべく、薄電気銅板の仕事もやった。此れでも段々と苦しくなり、鈍鉄薄鉄板の研究をやった。

金子様から一日一屯の製産設備を申込れたが、一日一屯と云えば莫大なる設備をせねばならん、既に退脚の準備が遅いのと、研究は不充分で、なかなか出来そうもない。其の研究中に、右の手に大火傷をしたので誠に申訳はないが勇気が無くなったので残務整理を大体して後は福岡工場長にお願いして、兵庫製油所に転任する様に、人事課で計って貰い、兵庫工場の媒触法に依る水素瓦斯製造の係をやって居ったが、或日久保田工場長に呼ばれ、大叱咤を受けた。「此の問題は或る人の讒言であった」不愉快の日々を過した処二階堂氏からニッケル触媒の仕事をやって呉れないかと相談を受けた。相方とも条件が出来た。此の問題に早速かかった。私は金子様のお話は常々聞いた、然しお会いする機会もなく過して居った。

或る日曜日の午後現場で従業員を集めて、仕事の説明をして居った時に、事務所の小使爺さんが（好々爺さんであった）其のお爺さんが高さん高さんと大声で呼んで居ったが、私が顔を出すと大変大変と私の側に来て早く来て下さいと云うので、何事か判らないが、私は硫酸でボロボロになった作業服の儘外に出て見た。すると金子様が私を訪ねて来られたとのことで、私も驚いて其の儘事務所の方に行く途中で、金子様にピッタリ逢った。高様は貴下かと突然の訪いに私は左様です、私も少々堅くなった様だった。「ニッケルが出来たそうですが見せて下さい」と云われたので、結晶槽から緑色の美麗なる結晶が、ツララの様に鉛板の儘を御覧に入れた。金子様は屋外に出て、顔を斜にして暫く見て居られたが、帽子の横に穴の開た中折帽左手で取って、丁寧に御じぎをして何回も有り難うと云われたので、私は恐縮した。此のニッケルには私は随分泣かされました。此れで硬化油工業が事業化される、而し私は今までニッケルの輸入には苦心致しました。それからの見透は何如と質問せられたので、私はスペントニッケルの放置しある約一〇〇屯近くあるかと思われる所に案内して、もう少し設備の改善をすれば兵庫工場の副原料の購入する事はいりません事を申上げたので非常に喜んで、私の手を取って宜しく頼みますと何回も申された。斯様に喜んで貰って私も先に久保田工場長に叱られた事を忘れて、此の工場には研究改善すべきことが多いのでどしどしやる気になって、久保田工場長も私を非常に信用して下さって未解決の問題を次々と相談せられた。

次は電解槽の問題等も改善することとしてやって居る内に、関東大震災が起ったので、程ケ谷工場は全壊したので、王子工場に硬化油工場を建設することとなり、又私にその大問題を命ぜられたので東京へ移住することとなった。

金子様は近代稀なる偉大なる事業家であるが惜むらくは技術家を遇する暇がない。而して心理を摑むのが充分ではなかった様に思われる。村橋様や久保田様とも後世には意気が投合していなかったのではなかろうか。鈴木商店にも遺憾である。

久保田様が欧米を視察の機に買って来た模形ホットプレスが雨曝になって居った、二―三人の技術家が此の活用に当ったが、皆サジを投げて居った。久保田様から私に相談があったので研究にかかった。其の頃久保田様は金子様に相談し、銅製油脂分解用オートクレーブを播磨造船に注文したので引き取る事になったが設置工場を赤煉瓦の倉庫を工場に使用することとなり、設置基礎も出来オートクレーブも入荷したので、設置し附属装置も注文して居ったので分解プラントが出来た。而してリスリン濃縮装置も田中機械から入荷し運転中に真空ポンプに事故があった、其の当時田中機械には労働争議があってセットボウトを忘れて居るから早速修繕して貰ったが、悪いので全く困らされた。

脂肪酸のパイロット工場も出来たので、オレイン酸研究を初め、試験品一屯製造して日本毛織で紡毛油の試験を始め、此れも使用可能なることを確認せられ売買協約もほぼ出来る様な段階にまで進んだ頃、金子様は時の農商務大臣は日本グリセリン会社のグリセリンの助成金問題を打切問題があるので、政治問題が起り日本グリセリンを合併し全日油脂グリセリン工業株式会社が設立せらる様に此のホットプレスが商談に有利になり且つ合併の速進剤となったのである。

私が後に佃工場に勤務中のことであるが、化粧用ステアン酸の製造すること相成り又此のホットプレスが活動し、能力の不足をきたしたので此の輸入ホットプレスをモデルとして十基新設した。

金子様の事業熱の旺盛なのには敬服の外はありません。謹んで故人の御冥福を御祈りして止みません。

サラワク現地の哀歓

――北ボルネオ水銀鉱山と炭坑――

宇津木亥一

日沙商会は明治四十年代からサラワク王国内に、広域のゴム園を領有し、多数の邦人を送り、栽培、製産、輸出と同社百年の計を建てていたが、太平洋戦争勃発とともに一大転換を強いられた。占領政策により過去のゴム一辺倒から、新しく水銀、錫、石炭、ダイヤ、木材、スカッチ染料其他の重要開発事業を一任されたからである。

金子大翁のお指図により私は大北電信がストップされた昭和十七年「日沙」に入った。入社したからにはアッという間に南方へ飛ばされるものと覚悟して、恐る恐る会社へ出頭すると「あ、よい処に来た。今から直ちに東京へ」と汽車切符を渡される。翌朝万平ホテルへ着くと「よく来た、いま陸軍省から書類が来たから、これを至急神戸へ届けるように」という。それから再び東京へ着いた。使命は別にあったのですが始めは化された感じである。しかしこれが鈴木式だったと思い出した。大鈴木はなやかりし時代何時でも何処へでも直ちに出向し得る心構えの雰囲気のうちで育った。そして遂に或る日、赤電一本入るや否や、スラバヤへ行くか、行くなら一週間以内にでも立って欲しいと云い含められた。もう輸出部では「北野丸」のキャビンが予約されてあった。大正十一年夏の話です。

開戦にのぞみ北ボルネオ攻略に向う陸軍船団の誘導を大関雄只さま以下幹部数名が引きうけられた。大したトラブルも無くミリ敵前上陸は敢行され、クチン沖にさしかかると、「香取丸」などは撃沈され犠牲も出たが文字通り疾風迅雷の占領であった。その功労に酬いる為に、現地占領事業の主要部分は殆んど「日沙」の手中に帰した。他社は後を追って来たが、とてもその比ではない。

その主要産業の第一が水銀であった。銃砲弾発火に必枢欠くべからざる貴重な物資を、わが社がテゴラ、ガデンの廃坑を復活して遂に月産数屯を採取して見せたのだから、軍の喜びは並み大抵ではない。貴宝「水銀」は毎飛行便で内地へ護送された。

現地へ着いてから私は幾度となくテゴラ、ガデンを見学し、また或る時は資金源である南方開発金庫のお偉ら方はじめ色々のお客さまを視察に案内した。

英国は此処で水銀を採取したが、すでに取り尽し採算不能に陥り、遠い過去に山を捨てた。わが方はその記録をもとに、採算無視の採堀である。私が始めて暗い坑道に入った時には、生水銀の珠がコロコロと手に触れた。比重の高い水銀は辰砂としてあらゆる土壌、砂礫を貫し段々と深処へ向け沈潜し行き、ついに岩盤

に達してとまっている。此処まで堀り行くのは容易ではない。然るにテゴラもガデンも原鉱の山から流れ出る総ての河床を底深く岩盤まで堀り下げ一切の辰砂を取り出した。軍票を頼りに、機材に頼らず、幾千の土民男女を狩り集め、この採堀、水洗、撰鉱、蒸溜の仕事に注ぎ込んだ。映画にでもしたい壮観であった。この山も資源の減少、戦況の不利、軍票値の下落、稼動者の離散と原因が重複し年と共に寂しい山の姿に変って行ったのです。

サドン炭坑へはクチン港から外洋に出て更に他の河を遡航し約一日で行けた。山の横腹に坑口をつけ、奥深く堀り進んだが、予想外に炭は出ず、計画した沿岸航行の艦船への供給には不足した。機材もまだ到着せず、北九州からは有能な技術者十数名派遣されたが、土民の労働力のみを駆使しての難事業である。ブルネイのセメントもやはり機材不充分で完全製品までには漕ぎ付け得なかった（日商四十年の歩み三六一頁参照）機材は内地のみに依頼せず、広く占領区域からも求める目的で人を遣り探し求めたが何分にも輸送の方途が立たず、人間も足らぬ勝ちであった。

テゴラは事務所、宿舎が小高い丘に配置され、テゴラ神社も祭ってあった。削り取られ赤肌を出したカブト山を中心に広く四方へ赤褐色に展開していた。ガデンも大略同形である。温度は余程低く殊に夜ともなれば爽快である。陽が西へ傾くと熱帯特有の華麗な夕映雲の祭典が始まった。時にはまた十数分も降れば膝を没するほどの豪雨にも見舞れる。太古そのままの原始林は背景山系から視界の及ぶ限り地平線まで濃緑のジャングルの波を打たせ雄大そのもの、静かな払暁を迎える時刻には無数の小禽が奏でる自然の交響楽をふんだんに贈って来た。小川には名も知らぬ小魚が群生し閑暇を見てはすくいに行った。事実この環境は極楽浄土その儘の楽しかるべき生活には違いないが戦の偵察機が頭上に舞う終戦近くになると、冷汗三斗、何処に身を隠そうかと焦った。クチン飛行場へは夜毎に定期便が襲来し、わが社は朝になれば穴埋めの使役に出た。わが連合艦隊に既にブルネイ湾の集結地を出航し、レイテの死の血祭りに去り行きつつある前後である。

作戦上クチン軍司令部は早急にアピ（ブルネイの東方、ゼセルトン市の郊外）へ転進した。私は事務連絡で約半年、其処へ滞在した。日々司令部へ通う右側の眼も覚めるような紺碧の海、波静かな水上生活を営む原地人の家屋、しばしば訪れてその清潔さに驚いた。一九七一年の現在、時たまテレビに映出されるキナバルの霊峰は南方十数キロの空へ海抜四千米の雄姿をあらわしていた。白雲が峯を昇るかと思うと、また滝つ瀬の如く霧となって下降しはじめ、どうかして途中までででも登って見たいと願ったが果せなかった。

その後クチンへ戻り、終戦に近い一ケ年はテゴラに腰を据え閉鎖事務に入った。戦況は刻々に傾いて行くけれど、少くとも五年間は持久戦に耐え得るためにと備蓄した米数千俵はじめ、豚、鶏など多くの大切な食糧品を、遂にわが飛行隊の地上部隊へ引き渡し、邦人の集結地バウ市へ向って泣く泣く山を降った。

この悲しい血涙物語を、故東郷水銀部長と、故宮山石炭部長との英霊に捧げます。東郷さんは、時すでに「阿波丸」と運命を共にし南海の藻屑と消え失せておられました。宮山さんは「阿波丸」を拒絶し機帆船を手に入れ跳び石伝いに九州へ帰還された勇士であったが未だ耐乏時代を切り抜け得ない頃に他界されました。両首脳がその使命達成のため精根を尽された気概に対し満腔の敬意を払います。しばしば起居を共にし御高説拝聴しながら強度のアルコールを含む地酒を汲み交しました。

その他ともどもに手を携え現地へ赴いた多数の同僚、先輩、時には天にも昇る歓喜を祝ったが、またしばしば言語に絶する辛酸を嘗め、死線を跳び越え、跳び越え来たのが普通です。そして生存者は結局リュック一つで、昭和二十一年春寒い大竹港の埠頭へ送還されました。現地へ赴く海洋渡航中の敵襲、閉戦時の慌しい激動をはじめ、病気、怪我、或は乗り物の転覆などで落命された数多い社員各位に対しては、深甚の哀悼の意を表します。

一九七一・九

◆原稿募集

内容　随想、和歌、俳句、絵画、写真、鈴木時代の思出等、原稿用紙四百字詰、五枚程度。

締切り　昭和四十七年五月末日

送り先　神戸市生田区京町七二
太陽鉱工KK内
『たつみ』編集部宛

心のふるさと

今谷残香

私には故郷がある。高知から西へ約四〇キロ小さな田舎の町だが、風光明美山の幸海の幸に恵まれた平和な町である。私はその故郷を出てからかれこれ五十幾年にもなるが、未だにあの町が母のふところのように思われてなつかしい。三方は山でかこまれ、南は遙か太平洋から押よせる荒磯、その故郷の町は今も昔もあまり変りばえしないらしいが、私はむしろ発展しない昔の儘の方がなつかしい。

子供時代に学校帰り鎮守の森の椋の木に登って、猿のように枝から枝へ渡り、黒くうれた小さな実をとって食ったものだ。あの椋の木今も実をつけているだろうか。西ノ池によくエビをとりにいったナー、あのエビを親父が串にさして焼き甘い甘いとよろこんでくれたが、今でもあのエビとれるだろうか。正月の火鎮祭の大角力で子供角力をとり、五十銭の賞金をもらって角力好きの叔父が見物席から一升瓶をふり廻してよろこんだナー祖父のお供をして小さな舟を漕ぎ、鯖釣りによく出かけたものだが、大きな鯖がかかると子供のオレには手にあわず、その度に祖父がニコニコして又釣れたかといってよく手を貸してくれたナー…

そうした瑣細な事迄頭に残りいつ迄も故郷の思い出はつきない。何んといっても故郷はいいものだ。

私は大正八年に鈴木商店の見習員に採用された。所謂ボンさんである。毎日オリベヤから宇治川の本店に通ったものだ。加納町から三角丁場を南へ三宮穴門を通って相生橋東側へ出て本店へ定った道を往復した。

始めてツメ襟の洋服を支給された時便所へいってズボンを全部ぬいで大便し洋服なんて何んと不便なものだナーと思った。始めて靴をはいた時うれしくて朝夕欠さずいたわり磨いて頬ずりしたものだ。食堂での食事は食い放題、木ノ葉丼を四杯くって五杯目をとりにいった時、御園生炊事軍曹がレコードといって差出してくれたが、よくもあんなに食えたものだ。尤も採用試験で面接の時西川支配人から「君は何ばい位飯をくうか」と問われ「ハイ六杯位です」と答え、森支配人、高橋主任さん達に笑われ「そうかそうか」で合格しているので大喰いは公認とゆうわけ。夏は往生したナー。オリベヤは南京虫の巣だった。毎夜のように徹夜で南京虫と斗い殆んど眠る時間はなかった。宮田舎監からのみとり粉を貰って寝床の周囲にまいても南京虫は悠々とそのとりでを乗り越えて大挙攻めてくる。むしろ見事とゆう外なかった。鍵番で本店の書類庫の二階で同僚二人と寝るのだが、ここでも南京虫との斗いで朝迄座ったきり全く処置なしだった。お家さんの誕生日はうれしかったナー、月給三円五十銭の私達ボンさんに迄二円のお祝を頂いたからナー、その二円もシルコ屋とウドン屋の借金を払ってパー。併しよく仕事もしたが勉強もした。そして何んの屈托もなく伸び伸びと楽しく朗らかに青春時代を過す事が出来た。私のボンさん時代鈴木は今も尚心の故郷であり、母のふところである。土佐の故郷へは帰ることもできるが心の故郷鈴木は昔を今に戻すすべもない。

過ぐる昭和三十五年十月、神戸の国際ホテルで鈴木のOB否残党一六二名が参集、辰巳会が発足した。思いは同じ心の故郷を慕ういわば郷愁の然らしめた所か、あの時は二十年目三十年目に逢う先輩と後輩、同僚の顔一寸みただけでは思い出せない、そしてお互いに手を握り肩をたたきあって「元気か元気か」とゆうきりで、後は言葉がでなかった。あの発会式を契機に毎年一・二回大きな会合があり、時には三百名を越える大会もあったが、あれからモウ既に十年は過ぎた。会合に集まる顔ぶれも大体定ったように思われる。常連は二百名たらずか、会員の数はまだ可成多いときいているが、あとの会員達はどうされているだろう。真逆故郷を忘れたわけではあるまいに、モット大勢の会員に顔を出してほしいものと思う。

会合に出たからといって別に難かしい話をするわけでもない、例え手はとらずとも肩はたたかずとも遠目にみながらーあの人船舶部にいたナー随分年をとられたナー、アッあの人外国電信部にいたナ、よく大声でどなっていたが、あすこに鉄材部の先輩がいる、紳士相撲の大関だったが随分やせてみえるがまだ元気そうだナー、向うにいる人ボートの選手